

## 「キリストを訪れた東方の三博士」

マタイによる福音書 2 章 1 - 12 節

森島 牧人 牧師

聖書の中にはクリスマスの出来事が書かれた箇所がいくつかありますが、今日はその中の一つマタイ福音書 2 章を読んで行きたいと思います。それは「イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。」(マタイ 2 : 1) と始まっています。主イエスがイスラエルの南の方のユダヤ地方と呼ばれる国で誕生されたということですが、その時のその国の王がヘロデであったと、聖書はわざわざ記しています。それには理由がありました。

実は、ヘロデ王はユダヤ人ではなく、ユダヤの王家の家来の家系の一人でした。彼は王家の内紛に乗じて、ローマの支配下にあったユダヤの王の座を奪い取ったのです。そしてその承認を得るために同じく内紛状態にあったローマに入り、ローマ帝国の指導者・アントニウス(クレオパトラと結婚)やオクタ비아ヌスらに巧妙に取り入り、自分の地位を確かなものとしたのです。

力づくで王座を手に入れたヘロデは、それゆえにその地位を力づくで奪い取られることを非常に恐れていました。その恐怖から彼は次々と身内をも殺し、それは自身の妻子にまで及んだのです。このような王の統治する欲望の渦巻く只中に、主イエスはお生まれになりました。美しい世界ではなく汚濁にまみれた世界の中に、主イエスは降りて来られたのです。しかし、このことの中にこそ私たちの<希望>はあり、それこそが聖書が語る内容なのです。

聖書は、「そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』」(同 2 : 1・2) と続きます。神がこの世に誕生したことを知った人たちが、遠く離れた異国からユダヤへやって来たと言うのです。今では占星術は遊びの分野のものという感じですが、天候などがすぐに生活に影響を及ぼし、生きることに厳しかった当時に於いては、先々のことを知るために、この占星術はなくてはならないものでした。従って占星術の専門家は非常に重要な存在で、高い地位にあったのです。

さて、この占星術の学者といわれる人々ですが、幼い頃教会学校の降誕劇で三人の博士の一人を演じたということもあり、私はこの人たちに強く心惹かれて来ました。民の生活と安全を託されて、彼らはみんなが寝静まった時間に起き、夜の間中暗闇の中でじっと星を見ていたのです。夜起きて暗闇の中で星をみる・・・それは今の私たちにとっても大切なことではないかという気がします。と言いますのも、私たちが今見ているのは昼間、それも地上のことだけです。昼間、地上のことだけを見ていると、地上の世界を動かしているのは、自分たち人間であり、世界の中心は人間であると思込んでしまうのです。

しかし夜になると、見える世界は一変します。夜に見えるのは地球の外・宇宙です。無数の星が、その宇宙に浮かんでいるのが見えるのです。そんな世界を見ているうちに、人間が世界を動かしているなどと考えるのは、大間違いであることに、気づかされるのです。そして自分の生きている地球が宇宙の中の小さな一つの星でしかないこと。そんな小さな星の上に自分が存在しているのは何故なのか。誰が自分たちをここにこうして生かしているのか。そういうことを考えるのは、まさに夜、じっと星を見ていた時にこそ生まれる考えでしょう。

そういう意味に於いて、この三人の学者たちは、星を見る意義、つまり人間がこの世界を動かしているのではないことを知っていた人々でした。そういう人々であったからこそ、無数の星の中に、救い主の誕生の印を見出し、そこに生まれた方が神であるということ、理解したのでしよう。

学者たちが無数の星の中に、御降誕の印を見つけたということを考えていますと、今世界中で、私たちの日常生活の中でも、星の数ほどの出来事があることに思い至ります。それを毎日毎日目にし、考えている私たちです。学者たちが、この暗い夜空の中の一つの星に新しい王の誕生の印を見つけたように、私たちも地上の大小の出来事の中に、神の働きを見つけることが出来るのではないかという気がして来ます。私たちにそれを見る確かな目があれば、三人の博士が夜空の星の中に神の働きを見つけたように、数多の日常の出来事の一つ一つの中にも神が働いておられることを、見つけることが出来るのではないかと思うからです。

(説教要約 羽入田悦子)